学　年	高校2年　　授業形態　必修・クラス単位・週1時間
テーマ	言語の違いを越えて世界を学ぶ
キーワード	異文化理解・国際交流・ポートフォリオ
概　要	「総合的学習」最終段階として、英語を使って世界の人々とコミュニケーションをはかり、自分の価値観を揺さぶるような異文化との交流体験を持たせることをねらいとする。生徒は電子メール・ビデオレターなどにより、学校生活など身近なことを英語で紹介することから交流を始め、さらに交流先の文化と自分たちとの生活との関わりを考える。さらにこれまでの学習内容を深め、地球的課題の解決を意識できるよう段階をおって学習を深める。これらの活動すべてはポートフォリオとして構築し、生徒が自らの学習を常に自己点検・修正・評価する。

1．学習の目標・ねらい

生徒は卒業後も、英語を使って討論したり、講義を聴いたり、インターネットや図書館で検索した資料を読んで、プレゼンテーションするために原稿を書いたり、論文を書くことを目的に、英語を生涯学習し続けるであろう。

そのため高校2年の段階において、英語を使って実際に世界の人々とコミュニケーションをとり、自分の価値観を揺さぶるような異文化との交流体験をもたせることをねらいとする。第1段階として、これまで「総合的な学習」の時間にまとめてきたプロジェクトを英語で発信したり、自分たちの学校生活のような身近なことを英語で紹介することで自分から交流を始めるきっかけを作ることが重要である。次の段階では、自分たちの生活が、交流先の文化（以下 Target culture）とどのように関わりがあるかを考えさせることを重視した活動を展開する。それぞれの段階で、ステレオタイプ的な理解や発信にならないように、思考が深まる過程を重視する必要がある。

学習の最終段階においては、単なる二国（二つの文化）間の問題に意識が留まることなく、今日の地球的課題〔環境・人口・食料・貿易・地域紛争等の問題〕へも交流の内容が展開していくことを想定すべきである。そのような問題の原因と、その解決へお互いがどのように貢献できるかを意識できるように交流を援助していく必要がある。

2．育まれる能力

（1）．これまで「総合的な学習の時間」で育んできた能力を活かし、さらに収集した情報を目標に応じて選択したり、統合する技能を高める。

（2）．異文化に生活する同年代の高校生の生活を理解すること等を通じて、コミュニケーションの道具としての外国語を学ぶという態度を一層強め、また異文化に基づいた異なる価値観の存在や、共通の関心事を意識する。

（3）．自国の文化を紹介したり、相手の文化を理解することで、相手に関心を持ち、疑問を投げかける。

3．中・高6カ年における学習の位置づけ

最終段階であるので、これまで生徒が完成させてきたプロジェクト・レポートはすべて情報源として大いに活用できることを前提としている。自分が興味のあることを他者にいかに効果的に伝えるか、という体験によって得られた技術を、英語によるコミュニケーションでも役立てていきたい。英語についても、高校1年終了段階で、自分の伝えたいことを述べるのに十分な文法的知識を得ていると想定できるので、高校2年で国際交流というのは適切であると考えられる。

4．指導上の工夫とポイント

（1）．自分たちの身近なところを異なる角度で意識することから、今日の地球的課題を意識するところにまでつながるように段階をおっての指導が大切である。例えば(a)日本文化の中にある Target culture に気づかせる。(b) Target culture にある日本文化に気づかせる。(c) Target culture に暮らす人々から自分の文化のイメージを知る。（d）人々が支え合う世界のシステムに、異文化に由来する異なる価値観がどのように影響するかを意識する。

（2）．電子メールのやりとりを通じて、距離や時間を超えることのできる直接的なコミュニケーションの手段を体験させ、動機づけを高める。

（3）．高校1年で履修する Oral Communication で生徒が体験するタスクを、この「総合的な学習」の前段階として意識したものにする。地歴科・公民科でも Target culture の学習を深めることができる。

5．評価の観点

（1）．活動のすべてを生徒がファイルに残し、教師・生徒がが学習を振り返った時に、学習過程を含む全体像を把握することが容易であるようなポートフォリオを作成する。

（2）．この「総合的な学習」の時間に何を期待するかを生徒に明確にさせてから授業に臨ませ、その目標に向かってどのように成長したかを自己評価させる。

（3）．活発な交流にするために何が必要かを意識させたうえで、自分の学習過程を常に自己点検し、学習の軌道修正を自ら行える。

（4）．異文化理解が妨げられるような内容の誤り・言語形式面における誤りを含んだ英語は、生徒がお互いが指摘し、自分たちで発信する内容を改善していけるような発見学習活動において有効に利用する。

6．年間指導計画　（35時間）

月	単元名	学習のテーマ・ねらい	学習の具体的な内容
4 5	1交流への準備	(1)広島大学附属福山高校での生活の記述	少人数グループを編成し、グループごとに以下のあ)～き)よりテーマを選んで活動する。英作文・HP・ビデオレターなど様々な媒体を考える。 あ:制服について い:毎日のスケジュール・行事 う:外国語学習 え:クラブ活動 お:社会活動 か: Target culture に関連して自分たちの関心・関わり き:その他
6		(2)異文化における学校生活	Target culture（以下 TC）出身の、留学生や地域の人を招いて交流し、日本とは異なる高校生活について直接理解を深める。
7		(3)これまでの「総合的な学習」作品の発信	高校1年までの学習内容をふまえて、自分の興味のあることを英語でまとめ、HP・ビデオレターで発信する。
8		(4)評価	国際交流に期待するものを意識させ、目標をたてる。
9	2交流の実際	(1)電子メールやビデオレターの交換	電子メール・ネットミーティングを体験させて、動機づけを高める。比較する対象を得たことで自国の文化についての理解を深める。
10		(2)交流先と自分たちの相互の関わりを考える。	1)TCと自分の文化の関わり 2)自分の文化にある TC を意識する 3)TC との現代における人的交

			流・経済的交流等 4) TCと自国の歴史的接点
11		(3)文化の違いを越えた相互理解について考える	相手の目を通じて見えてくる自国文化について考察するために、 1)「世代の壁」現象を題材に、文化が行動を規定することを意識させる。 2)ステレオタイプを批判的にとらえ、その偏見こそが個人レベルでの異文化理解の障壁となりうることを、実例をふまえて考える。
12		(4)評価	交流の実際を現象面の記述で振り返るだけでなく、その原因を分析し、今後の交流のあり方を考える。
1	3 交流の発展	(1)交流の継続	
2		(2)交流をより広い文脈でとらえる	お互いが理解し合うために・障害となること・助けとなることは何かを考え、今後お互いが共同して取り組めることは何かを意識する。 二国間だけで取り組める課題、地球的規模で取り組む必要のある課題など、生徒の興味に応じて交流が発展していく。
3		(3)評価	自分の価値観を揺さぶったものは何であったか、目標の立て方は適切であったか、軌道調整は適切であったか、自己の成長を適切に自己観察できているか